

「挨拶」

宮沢千尋

早いもので、名古屋に赴任してから一年がたとうとしている。この間、自分のこれまでの研究成果を整理して、講義の形で学生たちの前に提示するという作業に追われる一方で、個別論文という形で発表してきた。とりたてて苦勞したわけではないが、もう少し努力の余地があるのではないかという気持ちと、一年目はこのようなものであるという気持ちが交錯している。

初めてこの「挨拶」を書かせていただくので、少し自己紹介をしたい。私は、ベトナム北部村落の人類学的な研究、特に村落構造の変化と持続に興味を持っている。博士論文もこのテーマに沿って、フィールド・ワークを1996年から1997年まで一年半行った。その前の語学習得と修士論文執筆の期間をあわせると、ベトナム滞在期間は4年に及ぶ。本研究所で私は、東アジアと東南アジアの狭間にあるベトナムを、多角的な視点で研究することを目指している。

私の1999年度の主な活動は、『ベトナム社会と文化 第1号』（風響社刊）と、慶応義塾大学地域研究センター主催のシンポジウム「東アジアにおける血縁の再構築」への参加であった。ともに、ベトナム北部社会の親族構造に関する研究であった。

さて、本研究所独自のプロジェクトは、吉原和男先生主催の「アジア移民のエスニシティと宗教」が1999年度をもって完結し、まとめの段階に入っている。一方、南山大学全体から見ると、学部改組の作業が終わり、2000年度からスタートする。次の段階は、大学院、研究所の見直しである。人類学研究所がこうした潮流のなかで、どうあらねばならないかが真に問われている。また、学内外に人類学研究所がどのようなことをやっているのかを広く知ってもらうために、「アジア移民のエスニシティと宗教」を、流通ルートに乗る形での成果公開を考えている。そして、次なる研究プロジェクトも立ち上げていかねばならない。その意味で、人類学研究所員の責任は重い。

(南山大学人類学研究所研究所員・南山大学講師)

目次

「挨拶」	宮沢千尋	1	人類学研究所 所長日誌	8
南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料	李壬癸/土田滋試訳	2	研究会・講演会	12
			Asian Folklore Studies	13

◆ 調査報告 ◆

南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料

李壬癸¹

(台北市中央研究院言語学研究所)

1. 背景

小川尚義教授は台湾言語学の創始者である。彼はほぼ百年前の20世紀初頭に台湾原住民諸語の研究を始めた。現在では死語となった平埔族の言語も、その頃にはまだ活発に使われていたり、あるいは何人かの故老がまだ覚えていたのである。生存中、重要な論文を数多く発表し、また1935年には浅井恵倫教授との共著による記念碑的な大著(『原語による臺灣高砂族傳說集』)を出版したが、1947年に亡くなると、多くの未発表原稿や資料がそのままになってしまった。

小川(以下敬称略)の残した台湾原住民諸語に関するフィールドノートは、これらの言語に興味を持つ人にとっては重要である。ところが不幸なことに、それらのノート類がどこにあるのか、あるいはそもそも現在でも存在するのかどうか、誰も知る人がいなかった。1970年代初め頃、私は小川のノート類の所在について、馬淵東一教授にお尋ねしたことがある。馬淵教授は私信の中で、ほとんどは第二次世界大戦中に破壊されたがとしながらも、次のように書いている:

「私は、浅井教授が南山大学で教えていたところに、彼を訪ねる機会は一度もなかったと思います。しかし彼が南山大学当局を説得するのに成功して、故小川教授所蔵の言語資料を

購入したのは知っておりました。(本やノート類はアメリカ軍の空襲による火災から免れたものの、ほとんどの資料は破壊されてしまいました。)私が南山大学で教え始めたとき、小川資料について同僚に訊いてみたのですが、その件の詳細については誰も知っている人がおらず、南山大学図書館か人類学部図書室で探してみた方がいいのではないかと言われました。南山大学が小川資料を購入したのは1950年頃だったと想像しています。しかしその資料、とくに小川のノート類をきれいに分類することはできなかったようです。ですから、浅井が小川資料を「独占化」(monopolized)したのは自然のことでした。

土田滋教授はAA研(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)に保管されている浅井資料の中に、問題の小川ノートのいくつかを発見し、それらの多くを利用して何点かの論文を発表した(Tsuchida 1982, 1985; Tsuchida et al. 1991)が、これらの資料、とくに今日では死滅してしまった言語の資料は、非常に価値が高いことが判明したのである。

浅井は引退するまで、あるいは1969年に亡くなる少し前まで、名古屋にある南山大学で教鞭をとっていた。それから30年近くの歳月がたった。1997年春、南山人類学研究所所長ピーター・ク

ネヒト教授は、秘書に妙な箱があることを告げられた。浅井が残した3つの箱である。箱の上には「高砂族」とあり、さらに「触るな」と書いてあった。何年もの間、これらの箱は誰にも知られることなく、倉庫として使われていた無人の部屋に、ひっそりと放置されていたわけである。クネヒトはその頃、1964年に行われた「南山大学・東ニューギニア学術調査団」についての論文を書いていた。その学術調査団には浅井も参加していたから、もしかしたらそのときのデータかもしれないと思い、その箱を開けてみたのだが、ほとんどが台湾原住民諸語の資料であることがわかった。彼は東京大学教授だった大林太良氏に問い合わせ、その方面の専門家である土田滋教授を紹介された。ところが土田は当時忙しく、名古屋まで調査に来ることができなかった。しかし彼は今年初め頃、私にそのような資料が南山大学にあることを話してくれたので、私は東京外大のAA研と南山大学に保管されている浅井資料をなるべく早く調査してみたいと考えた。土田はAA研のクリスチアン・ダニエルズ教授(Prof. Christian Daniels)²と南山大学のピーター・クネヒト教授(Prof. Peter Knecht)に連絡の労をとってくれ、ようやく1999年6月25日に私は土田教授と二人で名古屋に赴き、これらノート類をざっと調査することができたのである。

実際に調べてみると、驚いたことに、浅井資料と言われていたものは、そのほとんどが台湾原住民諸語についての小川のフィールドノートや資料であることが判明した。これらの資料は、小川が1947年に亡くなってから半世紀近くにもわたって、外部の誰にも知られることなく、手つかずの状態に残されていたのである。浅井は小川が亡くなった後、小川家からこれらの資料を譲り受けたに違いない。そして浅井自身もまた亡くなるまで、自分の参考資料として、保管していたのだった。土田は小川資料の行方について浅井に訊いてみたことがあるそうだが、浅井はまだ公表する時期

ではないと言っただけだったそうである(土田 私信 1999/6/27)。浅井はその件については、結局土田にも真相を明らかにしなかったのである。

土田と私はその資料を丸一日かけて調査し、台湾原住民諸族の言語ごとにより分けた。中でも重要と考える資料については3時間をかけてゼロックスコピーをとった。いくつかの資料は台湾外の言語についてのものなので、以下の報告からは除外することにする。さらに、たとえば伊能嘉規の資料や友人同僚などからの手紙など、雑多な資料も含まれている。

2. 小川コレクション中の台湾原住民諸語資料

2.1 平埔族語 (Plain Tribe Languages)

2.1.1 一般 (General)

1. 熟蕃材料 (Plain Tribe Materials)

- 1) 高屏言語分布図(『臺灣文化史』より、伊能自身による抜粋)
- 2) 『台湾土蕃語集』(伊能の手書きによる『台湾府誌』巻16所載の番語)
- 3) 『熟蕃に關スル調査』杉山調査による Siraya 語、カタカナ)
- 4) 『台北平埔番変遷一覽』(明治30年5月、11年調査)
- 5) 伊能の「大甲社平埔蕃語」
- 6) 小川 Taivoan
- 7) 岸裡社、野村氏記すところの「大水氾濫の歌」と注釈
- 8) 『埔里社平原に於ける熟蕃分布』
- 9) 『各社起因沿革調査』

2. 台湾全島熟蕃統計

3. タイトルが付けられていない小川メモ

- 1) 奇武荖 (Kiburaw)、里腦 (Linaw)、流流 (Rawraw)、擺厘 (Paili) 及び打馬煙 (Tamayan) の5つのカバラン語方言の、約20語彙項目からなる比較語彙表

- 2) 霧社方言とカバラン語比較
(A comparison of Paran Seediq and Kavalan lexical forms)
- 3) 宜蘭番歌 (Kavalan or Trobiawan songs collected in I-Lan)
- 4) 宜蘭口碑 (Oral traditions of the villages in I-Lan, all written in Japanese)
- 5) 埤仔頭 (Siraya of Pi-a-t'ao village)
- 6) 岸裡社 (Several hundred lexical items of Pazez recorded in An-li-she)

2.1.2 ファボラン語 (Favorlang)

1. English-Favorlang-IV

Happart (1650) によるファボラン語—オランダ語英訳辞書に基づき、小川が英語のアルファベット順に並べ替えたもので、このノートは N から S までが収められている。A から M までは AA 研にあるが、その他のノートの所在は不明である。

2. ファボラン語南洋語比較 (A Comparison of Favorlang and Extra-Formosan Languages)
ファボラン語とフィリピン諸語を比較し、ファボラン語の音変化を述べる。

2.1.3 パゼツへ語 (Pazez)

1. パゼツへ語法資料 (Grammatical Materials of Pazez)
2. 岸裡社語彙資料 (2.1.1 の第三、(6) 参照)

2.1.4 カバラン語 (Kavalan)

1. カレワン語 (Kalewan language data collected in Hualien)

2.1.5 シラヤ語 (Siraya)

小川の平埔族諸語データの大部分はシラヤ語に関係したものである。いろいろな種類のものがある。

1. 『浜の真砂 五』

新港文書、Lacouperie (1887)、新港文書年代順表、新港文書語彙、新港文書に現れる人名一覧、漢名説明、官印一覧、その他を含む。

2. 『浜の真砂 九』

シラヤ語の文法分析

3. 番語文書年表(三種)
4. 新港文書 — 代名詞研究
5. Siraya とフィリピン語比較研究
6. 新港文書 — 分析研究
7. 新港文書
8. 新港文書 (Handwritten copy of two Sinkang manuscripts in Chinese)
9. 新港文書 (A table listing the dates, place names and abstracts for the Sinkang manuscripts)
10. 善化地図(大正十一年)、台湾日月新報社
11. Vlis 会話
12. 下淡水寄語 (Manuscripts of Lower Tamsui)
13. 『台湾語解』渡邊洪著・基氏訳(シライア語)

2.2 山地語 "Mountain" Tribe Languages

2.2.1 アタヤル語群 (Atayalic)

2.2.1.1 アタヤル語 (Atayal)

1. Atayal Dialect
2. Tayal I, by 渡邊栄二郎
Japanese-Atayal conversation (カタカナ表記)
3. Tayal IV
4. Tayal V
5. Tayal (渡邊氏調査)
6. アタイヤル語、会話法
7. タイヤル(小川によるタイヤル語の文法分析)
8. タイヤル蕃語集
9. Tayal, Sadeq, Bunun
10. アタヤル語集のアルファベット順によるカード
インデックス

2.2.1.2 セデック語 (Seediq)

1. セーダッカ会話(林著)
2. 太魯閣語会話(丸石著、林訳)
3. タロコ語調査(小川)
4. タロコ語音韻表(小川)
5. セデック語法(小川)

6. タロコ語テキスト、ロードフ社テキスト(1936年3月)
 7. 北藩(パーラン社)取調概要
 8. 浅井調査によるデータのセデック語カードインデックス
- 2.2.2 サイシヤット語 (Saisiyat)
1. 南庄熟藩語彙(カタカナ表記)
 2. サイシヤット音韻、単語(小川、43pp.)
- 2.2.3 ブヌン語 (Bunun)
1. ブヌン語(三笠[木原]、過坑[淵上])
 2. Vunung (Sibukun)
 3. ブヌン口碑伝説
 4. セブクン蕃語(カタカナ表記)
 5. ブヌン語彙(昭和3年10月、埔里過坑調査(カト社))
 6. ブヌン語彙(カナ表記)
- 2.2.4 ツォウ語群 (Tsouic)
- 2.2.4.1 ツォウ語 (Tsou)
1. ツォウ語音韻調査 — 付接頭接尾辞(タツパン社)
 2. ナマカバン社
 3. ツォウ語比較(ツォウ、サアロア、カナブ)
 4. ツォウ語音韻
 5. ツォオ(カナ表記)
 6. 達邦ツォオ族蕃語読本(大正3年1月)
- 2.2.4.2 サアロア語 (Saaroa)
1. 蕃語集四社生蕃部
 2. 浅井調査によるサアロア語彙インデックスカード
- 2.2.4.3 カナブ語 (Kanabu)
1. カナブ語彙インデックスカード
- 2.2.5 ルカイ語 (Rukai)
1. 主としてタロマク(大南)方言のルカイ語語彙インデックスカード
- 2.2.6 パイワン語 (Paiwan)
1. パイワン語法
 2. パイワン語の発音(小川)
 3. パイワン語彙(小川)
 4. パイワン語音韻調査(小川)
 5. パイワン族蕃語集(太麻里)(吉澤卯之松)
 6. パイワン・プユマ音韻調査(小川)
 7. パイワン語(山本寅吉)
 8. パイワン蕃語集(大場善太郎)
 9. パイワン語(小川)
 10. パイワン
 11. パイワン会話文法・昔話
 12. パイワン語研究
 13. 高士仏社語研究
 14. パイワン(小川)
 15. パイワンその他比較(小川)
- 2.2.7 プユマ語 (Puyuma)
1. プユマ語法調査並びに単語
 2. プユマ音韻調査表、付パイワン、マレイその他と比較
 3. プユマ語調査 — 卑南社、知本社(1930年8月)
 4. プユマ語法分析
 5. 卑南社語彙第二巻、三巻(第一巻は欠)
 6. プユマ語接辞インデックスカード
- 2.2.8 アミ語 (Amis)
1. アミ語法
 2. アミ語テキスト
 3. 蕃語字彙以外語彙
 4. アミ語
 5. アミ語インデックスカード
- 2.2.9 ヤミ語 (Yami)
1. ヤミ語語彙(小川)
- 2.3 その他の資料
- 2.3.1 小川論文原稿
- ほとんどは既発表論文の草稿で、少数の未発表論文原稿を含むが、その価値については明らかでない。

2.3.2 欧文資料

小川は台湾原住民諸語について書かれた西欧文献にも常に注意を怠らず、手書きでコピーをして研究していた。たとえば次のような文献を含んでいる: Bullock (1874-5), Dempwolf (1938), Lacouperie (1887), Steere (1874), Taylor (1888-9)。

2.3.3 中国語文献

西欧文献ばかりでなく、原住民に関する漢文資料からも、小川は膨大な量をコピーしている。その中には次のような資料が見られる:

1. 『番俗六考』(『台海使槎録』)
2. 『台湾府志』
3. 『鳳山縣志』
4. 『台湾輿図説略』
5. 『台湾輿図』(光緒五年、夏建綸撰)
6. 番曲(『台湾府志』十六拔萃)
7. 雑集(歴史等)

2.3.4 地図

数葉の地図(手書きの地図を含む)がある。ほとんどは今日入手不能のものである。私たち二人は時間の余裕がなかったため、これらの地図を詳しく調査することができなかった。

3. 小川資料の価値と彼の研究態度

南山大学にある小川資料は、言語学者ばかりでなく、民族学者や歴史家にとっても価値があるものである。70年からほとんど百年以前の、彼の生きた時代における台湾原住民に関する民族学的な情報を与えてくれる資料もある。たとえば、当時のそれぞれの民族の各村における戸数と男女数を記した資料がある。小川自身や伊能によって手書きされた地図も、非常に価値の高いものである。

これらの資料の中には、小川自身による調査データばかりではなく、今日では入手不可能な、先人たちの研究も含まれている。他の人の行った初歩的な研究に基づいた上で、小川はさらに

考察を深め、優れた研究をなし遂げたのであった。

これらの資料を見ると、小川がいかに勤勉な学者であったかがよく分かるのである。彼はまた他の人の資料を利用するときは、非常に注意深かったこともわかる。ゼロックスコピーなどなかった時代である。重要な欧文や漢文による文献も、すべて手書きで根気よく写さなければならなかった。小川の筆跡のほとんどは、よく読める丁寧なものである。

小川資料は、また、どのようにしたら効果的に研究することができるかについても、多くのことを教えてくれる。たとえば、たくさんの言語を比較した長い比較語彙表を作るときには、言語名を記した長い一枚の表を、ノートの最初のページに、ページからはみ出すようにして張り付けてある。こうすれば、一ページごとにいちいち言語名を書かないですむわけで、なんと頭のいい工夫ではないか。

語彙のインデックスカードを見ると、小川が語彙項目をすべて語根(あるいは語幹)によって並べ、それぞれの語根(語幹)の下に、いろいろな接辞のついた形をあげていることが分かる。これは台湾原住民諸語の語彙構造をよく知らなければできないことではない。小川は語彙分析をしながらインデックスカードを作っていたわけで、単に語彙項目をそのままアルファベット順に並べたのではなかったのである。

[注 1] 土田滋訳

[注 2] AA研の浅井資料は、現在、ダニエルズ教授が管理しておられる。土田は彼と連絡を取ろうとしたのだが、あいにくダニエルズ教授が中国に出張中であつたため、6月初旬まで連絡が取れなかったのである。

参考文献

- 馬淵東一 (Mabuchi Toichi)
1945 「故小川尚義先生とインドネシア語研究」『民族学研究』13(2):160-169. 『馬淵東一著作集 第三巻』再録.
- Bullock, T.L.
1874-5 Formosan dialects and their connection with the Malay. *China Review* 3:38-46.
- Dempwolff, Otto
1938 Vergleichende Lautlehre des Austronesischen Wortschatzes, 3. Austronesisches Wörterverzeichnis. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 19.
- Happart, Gilbertus
1650 *Woord-boek der Favorlangsche Taal, waarin het Favorlang voor, het Duits achter gestelt is.*
- Lacouperie, Terrien de
1887 Formosa notes on MSS., races and languages; including a note on nine Formosa MSS. by E. Colborne Baber. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series* 19:413-94, with three plates. London. Also published separately at Hertford (1887). 82pp.
- Steere, Joseph Beal
1874 [The aborigines of] Formosa. *Journal of the American Geographical Society of New York* 6:302-34. New York.
- Taylor, G.
1888-9 Comparative tables of Formosan languages. *China Review* 17:109-11.
- Tsuchida, Shigeru
1982 A comparative vocabulary of Austronesian languages of sinicized ethnic groups in Taiwan. Part I: West Taiwan. 『東京大学文学部研究報告 7: 語学・文学論文集』 pp. 1-166.
1985 Kulon: Yet another Austronesian language in Taiwan? *Bulletin of the Institute of Ethnology, Academia Sinica* 60:1-59.
- Tsuchida, Shigeru, Yukihiko Yamada, and Tsunekazu Moriguchi
1991 『台湾・平埔族の言語資料の整理と分析』東京大学.

[後記]上記の資料を発見した際、内容を詳しく調べず、浅井恵倫師のものだと仮に判断したが、この資料の正体を判明して、直ちに検討し、整理までして下さった土田滋と李壬癸両先生に厚くお礼申し上げる次第である。土田先生は早速李先生の英文原稿を邦訳して下さっただけでなく、小川尚義の遺稿も発表して下さいました。二人の先生方を私自身も引越したばかりの宿舎で迎えることになったので、たいした接遇はできなかったが、記憶に残る大変楽しい出会いの機会であった。先生方にお礼を表す。

参考文献

小川尚義

- 1999a「臺灣府誌に出でたる蕃語」『台湾原住民研究』第4号, 159-86。
1999b「臺灣蕃語の音韻変化」『台湾原住民研究』第4号, 187-92。

土田滋

- 1999「小川尚義の未発表原稿二編」『台湾原住民研究』第4号, 152-58。

(クネヒト・ペトロ)

◆ 人類学研究所 所長日誌 ◆

(1999.1月～12月)

記録: クネヒト・ペトロ

1/1(金)1999年元旦。本年の年報に「九」が多いことを考えると「ク」の多い年だろうかと何となく細やかな不安を感じたが、クネヒトの勝手な気持ちにすぎないだろう。実は、今年の春に人類学研究所で新しい専任研究所員を迎えられることがほぼ決まっている。それで、所長が独りでやってきた一年はもうすぐ終わろうとする明るい見通しになった。そのために不安感が完全に消えたわけではないが、主として明るい気持ちでクネヒトは友人夫婦と共に善光寺に初詣して、彼らの子供たちの学業成就も合わせて祈願した。

1/9(土)昨日から雪が降っていて、今日は積雪8cmの「大雪」になった。名古屋の交通は大混乱した。

2/11(木)入学試験の最中だが試験監督間の空いた時間にクネヒトは副学長の部屋に呼ばれて、新年度から南山大学三研究所の全研究所員によって構成されている研究所総合委員会の委員長の役を引き受けてもらえないかという相談を受けた。その後すぐ学長と面接して、話が最終的に決まった。

2/15(月)新しい第一種研究所員の候補者である宮沢千尋氏の業績審査委員会が開かれた。大学評議会で審査結果を報告するのが決まった。宮沢氏は一月中旬頃に東京大学大学院地域文化科学専攻文化人類学コースで『ベトナム北部村落構造の歴史的变化(1907-1997)』という題の博士論文を提出した。

2/21(日)現在名古屋市立大学文学部で客員教授として来日中のHeidelberg大学教授Klaus-Peter Köppingが来所した。Köpping氏が行なっている花祭りや霜月祭りなどの調査と日本の祭り

文化について話し合いながら、和食の味を楽しんだ。

3/1(月)今日の日付で人類学研究所は、人類学科の伊藤秋男氏に紹介された姜仁求氏(韓国精神文化研究院・韓国学大学院教授)を客員研究所員に迎えた。伊藤氏と組んで「日本と韓国の前方後円墳の発生と展開」の共同研究を行なうために姜氏は来日して、12月31日まで滞在する予定である。

3/2(火)昨日名古屋に着いた宮沢千尋氏に人類学科会議に出席してもらって、学科の教員たちに紹介した。初めて名古屋へ来た宮沢氏は今回先ず部屋探しに集中した。

3/5(金)出版が昨年当たりから大幅に遅れているAsian Folklore Studiesの原稿をクネヒトは印刷に渡した。そのために、ギリギリでありながら、1998年度の第57巻は年度内に完成する見込みとなった。

3/18(木)クネヒト研究所員は宗教文化研究所の所員や来客が泊まる「パウルス・ハイム」へ引越した。そのため、研究所へ通う時間は10分以内に短縮された。運動不足の原因がまた一つ増えたようである。

3/19(金)来る21日に南山大学大学院人類学科研究科の修士課程を卒業し、秋からNew Delhiの大学の大学院に入学する予定のAnthonysamy Sagayaraj氏とクネヒトは夕食しながら将来の計画を練った。先ず、彼に4月から人類学研究所の研究生の身分を与えることにした。

3/23(火)新第一種研究所員宮沢千尋氏は無事に名古屋入りして、研究所などに挨拶に来た。

4/1(木)手帳のこの日には「エイプリルフール」と記されているが、クネヒト研究所員に研究所総合

委員長の辞令書が交付された。この一枚の辞令書をもって、一気に多数の委員会の会員になったことがきょう初めて分かった。パンドーラの箱を開けた気分である。

今日、宮沢千尋氏が第一種研究所員として正式に人類学研究所に着任した。新しい動力をもたらしてくれるように大いに期待している。本年度に限って一応文学部人類学科所属だが、来年度から外国語学部において新設置予定のアジア学科に所属を移す予定である。将来的に宮沢氏に、アジア関係の研究をしている南山大学の研究者を中心に、人類学研究所主催の新しい研究プロジェクトを担当してもらうことになるだろう。

4/3(土)大学の入学式。研究所総合委員会委員長になったばかりのクネヒト研究所員は大学の役職者と席を並べて、ステージに上った。大学に勤めるようになってから二回目の入学式に出席した。

4/4(日)名古屋の近辺にある人類学関係の施設を知ってもらおうと思って、クネヒトは宮沢氏を連れて、リトルワールド屋外博物館を案内した。展示を見てから、モンゴル人のサーカスを観賞して、最後にモンゴル風料理を味わってみた。

4/9(金)東京大学に提出した博士論文の審査会が今日行なわれるので、宮沢研究所員は東京へ出張した。

4/13(火)新学期の授業開始の日だが、クネヒト研究所員はウィーンへ出発した。オーストリアの科学アカデミーのアジアの文化史及び思想史研究機関 (Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens)の招聘で当研究機関主催の研究大会に4/14~17の間出席した。大会のテーマ“Popular Japanese Views of the Afterlife”だったが、クネヒトは“Kuchiyose: Enacting the encounter of this world with the otherworld”という題で研究発表した。

大会の期間中にウィーン市営の埋葬施設 (Begräbnisinstitut)とその附属資料館を見学した。珍しい資料の豊富な展示を案内人がウィーン風のユーモアをたっぷり交えながら上手に解説してくれたために楽しい見学だけではなく、大いに参考になった。

研究大会後、葬儀の儀礼や死生観に関心を持っているクネヒトは知名度高いウィーンの中央墓地と St.Marx 墓地を訪れた。ヨーロッパの文学者、音楽家などの有名な文化人たちの墓の前に立つのは特別な経験だったが、ライラックが乱れ咲いている早春の St.Marx 墓地のモーツァルトの記念碑が一番印象深いものであった。

5/24(月)クネヒト研究所員は名鉄グランド・ホテルで開かれた「リトルワールド屋外博物館」の評議会に初出席した。

5/29(土)~30(日)東京都立大学で開かれた日本民族学会第33回研究大会に宮沢・クネヒト両研究所員は揃って出席した。大会の間に、クネヒトは人類学研究所の第六回研究プロジェクトを担当している吉原和男氏と共に風響社の石井雅氏と会って、プロジェクトの研究成果を刊行する条件と段取りについて会談した。

6/7(月)相山女学園大学の杉藤重信教授の紹介で南山大学のオーストラリア研究センターと合同講演会を開いた。丁度来日中の Christine Grant 女史を講師に迎えて、“Who is managing and protecting Australia’s Indigenous Heritage?”という題で講演していただいた。Grant 女史はアボリジニでもあるし、オーストラリアの Indigenous Heritage Section の Director を勤めているので、第一人者の経験を踏まえて、聴衆が深い関心を示した講演をして下さった。活発な質疑応答は、講演後に用意されていた夕食会の席へ持ち越された。講師の自らの経験と心がこもった話を通して、聴衆がアボリジニの抱えている問題とその複雑さを垣間見ることができ

たようである。

6/25(金)～27(日)土田滋東京大学名誉教授と台湾台北市の中央研究所の李壬癸教授は浅井恵倫先生が残したと思われる資料を調査する目的で研究所を訪れて下さった。二人は早速仕事にかかって、数個のみかん箱に入っていた資料を箱から出して、テーブルの上で並べて検討し始めて間もなく驚いてしまった。ほんのわずかなものを除いて、ほとんどの資料はかって台北の帝大で教えていた小川尚義先生のものであることに気づいて、驚いた。

7/3(土)「アジア移民のエスニシティと宗教」の研究例会が開かれた。

7/30(金)モンゴル共和国の首都ウラン・バルタルで 8/2(月)～8(日)の間に催される 5th Conference of the International Society for Shamanistic Research に出席するためクネヒト研究所員は海外出張した。“Yamatade: A link to the otherworld”と題して、口寄せ儀礼のコスモロジカルな一側面について発表し、大会を通して、「シャーマンのコスモロジー～世界観と神話」分科会の座長を勤め、閉会総会において分科会の発表等について報告した。

9/17(金)～19(日)の約三日間、南山大学創立50周年を記念する一行事として、宗教文化研究所がホストになって、日本宗教学会第58回学術大会が執行された。17日の「前夜祭」に、“New Trends in Religious Studies”というテーマのシンポジウムでは American Academy of Religion の代表として招聘された来賓三人がそれぞれ発表した。来賓はアカデミーの会長 Margaret Miles 女史、プリンストン大学の David Carrasco 氏とハーバード大学の Center for the Study of World Religions のセンター長 Lawrence E. Sullivan 氏であった。宮沢とクネヒト研究所員も幾つかの発表を聴講した。

9/25(土)～26(日)慶応義塾大学地域センター主催のシンポジウム、論題『「血縁」の再構築—東アジアにおける父系出自と同姓結合』において、宮沢研究所員は「ベトナム北部の父系出自・外族・同姓結合」というテーマで研究報告した。この地方の特徴として 1) 父系出自集団の深度が浅い; 2) 父系出自原理を裏打ちしている儒教規範はしばしば守られない; 3) 母方血族の関与は補足的親子関係による; 4) 同姓集団はほとんど見られないと指摘した。

10/6(水)クネヒト研究所員は生まれて初めて法廷に出た! 9月の初めに名古屋地方裁判所から依頼を受け、麻薬持込の罪で問われていたドイツ住まいの若いトルコ人のためにドイツ語通訳をした。数回に亘って、拘置所と法廷へ通うことによって今まで新聞記事等を通してしか知らない社会の一面を実際に垣間見ることになった。

10/7(木)客員研究所員の姜仁求教授は「韓国の古墳について」という題で、研究所主催の懇話会で課題を提供して下さった。午前中のイベントだったのにもかかわらず先生方と大学院生が十数人来て下さった。また、講演の後にも専門度の高い議論を盛り上げて下さった。そして講師を囲んだ昼食会でもまだまだ議論が続いていた。これからの研究所の活動にも考古学のことをより積極的に考えていくことが必要と思う。

10/18 リトルワールド屋外博物館の依頼に応じて南山大学ラテン・アメリカ研究センターと合同で三人の日系ペルー人の芸術家を迎え、講演兼デモンストレーションをしていただいた。ベナンシオ・シンキ(画家)、カルロス・ルンシェ・タナカ(彫刻家)とエドワード・トケシ・ナミザト(画家)の三人であった。研究所は主に連絡役を勤めただけで、具体的な準備と講演会の司会などの労をラテン・アメリカ研究センターの関係者を引き受けて下さったので研究所は助かった。リトルワールド屋外博物館館長大貫良男東京大学名誉教

授と佐藤信行中京大学教授というペルー研究者もかけつけてくれたので心強かった。

10/25(月)姜仁求客員研究所員は予定より早く帰国することになったので、今日は別れの挨拶のために学長を訪れた。短時間の会談だったが、アジア諸文化の研究とアジア諸国との学术交流を強化しつつある南山大学にとって韓国との関係は大きな意味を占めていることが確認された。その一つの手段として、姜教授の指示で韓国精神文化研究院と南山大学人類学研究所の間に雑誌等の交換が設立された。

11/5(金)夏休みが明けてから南山大学の研究所・地域研究センター見直しの動きが次第に活発になってきた。本日の日付で自己点検・評価委員会委員長の名前で配布された「評価アンケート」の集計結果はそのことを端的に示している。自己点検・評価委員会のメンバーを対象にした範囲の狭いアンケートだったが、彼らにおいて人類学研究所の活動知名度が低いことに驚いてしまった。にも拘わらず、このアンケートの結果は研究所の現状態の弱点・強点をある程度指摘しているので、見直しの参考資料になり得るところがある。アンケート結果に応える意味ではないにしても、先日研究所長は研究所の現状を説明し、報告書を執行部に提出した。

11/16(木)パリの EHESS で日本学を担当する Hartmut O. Rotermond 教授が研究所を訪れた。短い訪問だったが有意義な意見交換ができた。

11/25(木)本日発送された Asian Folklore Studies, volume 58-1, 1999 は、この雑誌の約 60年の歴史上画期的な一冊だと言える。中国青海省の著者たちによる論文の特集で、今まで利用できなかった新しい方法を取り入れることによって、楽譜を初め、現地の言語を表わす漢字と IPA の文字を惜しみなく使うことにした。

11/27(土)中部人類学談話会の第 135 回例会

は宮沢千尋研究所員の「顔見世」の場になった。クネヒト研究所員の簡単な紹介に続いて、宮沢氏は「ベトナム北部村落構造の持続と変化—一村社会主義—」の現状を展望—と題して発表した。博士論文に因んだテーマなので、彼がどのような研究をしているかを知ってもらうためにも関心深い発表であった。

12/2(木)東京の「如水会館」(神保町)で開かれた大林太良東京大学名誉教授受賞記念祝賀会にクネヒト研究所員は出席した。先生は第 10 回福岡アジア文化賞(8 月)と第 53 回毎日出版文化賞(11 月)受賞された。おめでとう。

12/18(土)クネヒト研究所員は 2002 年に開かれる予定の IUAES 中間大会の組織委員会に出席するため東京へ出張した。

研究所の諸活動

◆ 研究会 ◆

第6期研究計画(特定研究)

「アジア移民のエスニシティと宗教」

第1回研究会

日時: 1999年7月3日(土)

場所: 研究所1階会議室

報告: 熊田一雄氏

「アジア移民の宗教とエスニシティ」

特別講演: 林淳氏(愛知学院大学文学部)

「マレーシアにおける創価学会の展開史」

その他: 出版計画の段取決定

◆ 懇話会 ◆

日時: 1999年10月7日 10:00~12:00

場所: 研究所2階談話室

講師: 姜仁求氏

(韓国精神文化研究院・韓国学大学院教授 南山大学人類学研究所客員研究員)

演題: 「韓国の古墳について」

◆ 公開講演 ◆

第1回

日時: 1999年6月7日(月) 16:30~18:00

場所: 南山大学J棟1階特別合同研究室

講師: Christine Grant 氏

(Director, Indigenous Heritage Section,
Australian Heritage Commission)演題: "Who is managing and protecting
Australia's Indigenous Heritage?"

司会: 杉藤重信氏

(椋山女学園大学人間関係学部教授)

(南山大学オーストラリア研究センターとの
共同企画)

第2回

日時: 1999年10月18日(月) 2:45~4:30

場所: 南山大学E棟E23教室

講師: ベナンシオ・シンキ(画家)氏

カルロス・ルンシェ・タナカ(彫刻家)氏

エドワルド・トケシ・ナミザト氏(画家)

演題: 「日系人芸術家によるペルー現代美術」

司会: 遅野井茂雄教授

(南山大学ラテン・アメリカ研究センター長)

(南山大学ラテン・アメリカ研究センターとの
共同企画)

◆ 出版活動 ◆

宮沢千尋

「ベトナム北部の父系親族集団の一事例—儒教的規範と実態」『ベトナムの社会と文化』第1号、1999、7-33。

クネヒト・ペトロ

「文化と教育」『会誌』1999年3月、40-55。
(岐阜県高等学校長協会)

ASIAN FOLKLORE STUDIES

◆ VOLUME LVIII-1(1999) ◆

ARTICLES

Special Issue: “Folklore in Northwest China” (Guest Editor : Kevin Stuart)

Tibetan Tricksters (Kun Mchog Dge Legs, Dpal Ldan Bkre Shis, Kevin Stuart)

The Xunhua Salar Wedding (Ma Wei, Ma Jianzhong, Kevin Stuart)

Minhe Mangghuer Wedding Songs: Musical Characteristics (Qi Huimin, Zhu Yongzhong, Kevin Stuart)

“Laughing on the Beacon Tower”: Spring Festival Songs from Qinghai
(Dai Yanjing, Keith Dede, Qi Huimin, Zhu Yongzhong, Kevin Stuart)

A Ritual Winter Exorcism in Gnyan Thong Village, Qinghai
(Norbu, Zhu Yongzhong, Kevin Stuart)

RESEARCH MATERIAL

Folk Medicinal Plants of the Nagas in India (Sapu Changkija)

BOOK REVIEWS (16)

◆ VOLUME LVIII-2 (1999) ◆

ARTICLES

The Arts of the *Gannin* (Gerald Groemer)

A Stinger in the Tale: The “Sudden Awakening” Ending in East Asian
Folktales (Alan L. Miller)

Papercut Stories of the Manchu Woman Hou Yumei (Mareile Flitsch)

The Social Significance of the Shaman among the Chinese Reindeer Ewenki
(F. Georg Heyne)

Spotted Doves at War: The *Praak Sangkiiil* (Robert Knox Dentan)

BOOK REVIEWS (14)

雑誌 Asian Folklore Studies の購入等に関するご連絡は下記の所へお願いします。尚、年間の購読料は¥6,000円(団体)と¥3,000円(個人)となっています。

連絡先

〒466-8673 名古屋氏昭和区山里町18

Asian Folklore Studies 編集室

TEL: (052)832-3111(南山大学代表)

FAX(052)833-6157

研究所発行刊行物

人類学研究所紀要

No.1	¥500
No.2	¥500
No.3	¥500
No.4	¥500
No.5	¥1,000
No.7	¥1,000
No.8	¥1,300

南山大学選書

1 アフリカの矮小民族	¥2,000
2 母権	¥2,500
3 アイヌ文献目録	¥1,000
4W.シュミット記念論文集	¥3,500

人類学研究所叢書

1 伝統宗教と民間信仰(S57)	¥2,500
2 宗教的統合の諸相(S60)	¥2,500
4 伝統宗教と知識(H3)	¥2,800
5 宗教・民族・伝統:イデオロギー論的考察(H7)	¥2,800